

板倉鼎・須美子の書簡

20世紀前半のパリに世界各国から集まった画家たちは「エコール・ド・パリ」と総称されています。この時代、日本からも大勢の画家たちがフランスに留学しました。松戸ゆかりの洋画家、板倉鼎・須美子夫妻も、1926（大正15）年から1929（昭和4）年までの3年あまりの間パリに滞在しましたが、鼎は多くの優れた作品を残して1929（昭和4）年、急病のため28歳で早世しました。鼎の指導によりパリで油絵を始め、すぐに豊かな才能を現して高く評価された須美子も、帰国後に25歳の若さで病没します。

留学中、鼎と須美子は松戸の鼎の家族へ宛てて筆まめに書簡を送りました。松戸からパリへ、ふたりの無事を祈りながら仕送りをしてくれる家族に対して、日々の暮らしや制作活動、パリで生まれた赤ちゃんがすくすく成長する様子など、様々なことを報告しています。また藤田嗣治、佐伯祐三、岡鹿之助らをはじめ、当時パリで活動していた日本人画家たちの動静にもふれています。

これらの貴重な書簡は、松戸の板倉家で大切に保管されてきました。松戸市教育委員会は、その整理と活字化を1990年代から始め、2020年3月、371通を収録した『板倉鼎・須美子書簡集』を刊行しました。



板倉夫妻と長女・²²
左はマダム・テッパ（アバルトマンの大家） パリ、1928年